

報告書

令和6年度 千代田学

創作作品における坂道の研究を通し千代田区の坂を舞台にした短編映画制作

城西国際大学 メディア学部

佐藤克則

2025年3月



目次

1. はじめに

1. 1 研究背景

1. 2 研究目的

1. 3 研究方法

2. 調査と作品分析

2. 1 千代田区の坂道調査

2. 2 創作作品における坂道の分析

3. 映画制作と上映

3. 1 脚本執筆

3. 2 撮影準備

3. 3 撮影

3. 4 仕上げ作業と上映

4. 考察

4. 1 研究と制作によって得られたこと

4. 2 撮影における困難 坂道の大変さ

5. 結論とまとめ

6. 千坂物語 脚本

1. はじめに

1-1 研究背景

本事業では、千代田区の坂をテーマとした短編映画を学生と共同で制作した。

千代田区は名前のついた坂の数が東京23区のなかでは5番目に多い。そうした坂をモチーフにした短編映画制作を通じ、千代田区の環境や風景を、坂という視点から捉え直してみるのが目的である。

映画や小説などの創作作品で坂を取り上げている作品は多い。「坂道のアポロン」「柘榴坂の仇討」「たまらん坂」「コクリコ坂」や、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」などの作品は題名にも坂を使用している。また内容としても、坂は印象的な場面設定に使われるだけでなく、シンボリズムとして、登場人物の高揚や緊張を表現し、また物語の進行とともにキャラクターの成長や変化なども表すこともある。こうした創作における坂というものを研究し、千代田区を舞台にした短編映画制作に反映させていく。千代田区の風景や環境を短編映画によって捉え直すことで、新たな風景としての千代田区を描くことが目標である。

1.2 研究目的

坂道は実際に歩くと敬遠されることが多いのが実情ではないだろうか。自分の足で移動することが少なくなった現代、なるべく坂道は避けて通りたい、という意識を持つ人は多い。しかし今回、制作した短編映画によって、坂道のある風景を魅力あふれる姿として捉えたかった。映画を見たあとには、実際に歩くことが楽しいと思ってもらいたい。普段、何気なく歩いていた坂に歴史があることや、物語のなかで使用した坂の演出効果を感じながら歩くことで、今までとは違った風景が広がることを期待する。

また千代田区以外の人にもPRになるような作品にしたい。アニメなどで取り上げられた何気ない風景が観光地化するという事例がある。「聖地巡礼」と呼ばれる現象であり、アニメ「君の名は」で登場した四谷の階段や、「スラムダンク」での湘南の踏切などが、それにあたる。こういった形で、千代田区の新たな魅力の発信に寄与したい。

1.3 研究方法

- ① 学生と共に映画や小説など創作作品における坂道の研究をする。同時に、フィールドワ

一クとして千代田区の坂を調査していく。名前と歴史がある有名な坂から、あまり知られていない坂まで、短編映画のモチーフとして使用できるものを探していく。

- ② 研究とフィールワークを基にしたストーリー案を脚本として制作する。作品の長さは30分を想定したものとして執筆する。
- ③ 作品制作。撮影の準備、本撮影、撮影した作品の編集仕上げ作業を通し、作品を完成させる。
- ④ 完成した作品を上映する。上映イベントでは、制作した学生によるティーチインを企画する。
- ⑤ 完成作品の公開を企画し実行する。Web配信、映画祭での公開など、千代田区以外の人たちにも作品を視聴してもらう。

2. 調査と作品分析

2.1 千代田区の坂道調査

千代田区にある坂道の位置や由来、また創作における坂道の調査をゼミ生とともにおこなった。千代田区のHP内にある「千代田区内の坂」を参考にした。由来など、興味深いものや、短編作品に使用できそうなものなど、リストアップをする。

<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kuse/gaiyo/yokoso/saka.html>

また、実際の坂も学生が調査に行き写真撮影をするなどした。

2.2 創作作品における坂道の分析

映像作品にしぶり、映画に登場する坂道を分析した。まず「メタファー・シンボル」という観点から、韓国映画「パラサイト 半地下の家族」を研究する。この映画では、坂道における上下という位置関係から、格差社会を比喩する表現が数多く見られる。登場シーンを分析した結果が以下となる。

- 00. 08. 11 坂の上には希望があるという象徴 坂の下で主人公たちはこれからの計画を話す
- 00. 12. 13 坂の上にある豪邸は格差社会の象徴
- 00. 13. 16 豪邸に到達するために階段を使って上昇していく姿が、半地下から抜け出そうとする主人公の気持ちを表現する
- 00. 46. 10 追い出された家政婦は、坂をくだっていく。いまある地位から転げ落ちたことの表現。
- 01. 06. 31 地下室の発見。半地下の人たちよりもさらに地下があるという表現。
- 01. 32. 02 豪邸から出でていく家族。ひたすらに坂をくだっていく姿は、人々の地位にもどっていく悲しさや寂しさを表現する。
- 02. 04. 43 坂を上ることで、金持ちになったことへの表現

また、「場面設定」という観点から、韓国映画「チェイサー」を題材にした。「場面設定」に坂道を使用することで、登場人物の行動が変化していく。同じシーンであっても、平坦な道

で、その芝居がなされるか、坂道によってかで、変化が起こるのである。「チェイサー」のなかにも、主人公が犯人を追いかけるシーンがあるが、その場面設定において坂道を使用することで、登場人物たちの動きに躍動感が出る。以下は、「チェイサー」で使用された坂道の効果についての分析である。

00.02.33 印象的な場面として観客に覚えてもらいやすい場所。のちにこの場所が誘拐犯の家の近くというのがわかる。

00.28.00 せまい坂道で逃げ場所がない閉塞感 犯人の家の近所というのも示している。

00.31.00 坂道をつかっての追跡劇 登り下りという変化が多い場面において、登場人物たち緊張感の高まりを演出している。

00.49.00 探さなければいけない場所が、坂道の数の多さによって示す。その広さ故の絶望感。

01.13.00 追跡劇による疾走感。

01.36.00 捕まっていた女は降りる、同時に犯人は上昇していく。いつか出会ってしまうのでは？ サスペンスを高める演出。

また、これらの分析をもとにゼミ学生と共にワークショップを行った。

劇場アニメ「天気の子」を題材にし、劇中で使用される坂道について分析。さらにその分析結果をもとに、4チームにわかれ、坂道を使用した1分間の短編映画を制作した。

坂道や階段を使って、上下という位置関係に登場人物の気持ちを表現する作品が制作された。坂道を効果的に使用することで、そのシーンの奥行きを増やすことに成功していた。



(作品の劇中写真)

3. 映画制作と上映

3.1 脚本執筆

千代田区の坂道調査と映像作品における分析を通し、30分前後の脚本執筆を開始する。ストーリーの核となるログライン（1行でアイデアを説明するもの）を「地方出身の千坂という女性が、千代田区にある大学に入学し、坂道の多い街のなかで、新しい出会いを経験する物語」とした。

千坂という名前には、「人生には千の坂がある」という意味が込められている。坂は人生でおこる出来事の比喩表現であり、これからさまざまな出来事を経験し、坂を昇るように成長していくほしいという親の願いがある。そして、千坂は東京に上京し、自分にとって一つ目の坂（出来事）を見つけるために奮闘するというストーリーである。物語の骨格が決まり、大筋のプロットも完成した。

3.2 撮影準備

脚本執筆と同時に、千代田区の坂道のロケハン（ロケーションハンティング）と呼ばれる作業も本格化する。脚本で想定された坂道を舞台にするシーンに合う場所の選定を始める。坂道が必要なシーンは

- ・メタファー（比喩）
- ・場面設定（景観が印象的なロケーションなど）
- ・由来が面白い坂道

という分類で、坂道を選んでいく。そこで選ばれた坂は、

九段坂 新坂（淡路町） 幽霊坂（淡路町） 帯坂 三ヶ坂 山王坂 錦華坂 諏訪坂
淡路坂 男坂 三宅坂 貝坂 紀尾井坂

となった。坂道の撮影許可の申請を進める。また実際にロケ場所として決まった坂道に再度、調査にいき、劇中の芝居をどう撮るかなど、繰り返し検討が行われた。さらに、撮影のためのスタッフ編成が行われた。また坂だけでなく、大学施設や主人公の実家などのロケ場所の選定やキャスティングなどもし、撮影準備は進んでいった。

3.3 撮影

撮影は11月27日から12月1までの5日間にわたって行われた。27日は、主人公の千坂の故郷を撮影するため、城西国際大学の東金キャンパスがある千葉の東金市でおこなわれた。翌日からの4日間、千代田区の紀尾井町キャンパスを中心に、坂道を巡って撮影となった。撮影に関してトラブルはなく、順調でスムーズな撮影であった。しかし、坂道を撮影するときの通行人を通すため、撮影を中断しなければいけない時間など、当初、想定していた撮影時間よりも多く時間がかかることがあった。また、坂道をいかに坂道らしく撮影するか、という技術的な問題についても、悩む部分が多くあった。

また季節的な問題であるが、物語上は春の入学シーズンの設定であったのに対し、実際には、12月の紅葉シーズンだったことも、映像に影響を与えた。美しい千代田区の紅葉や銀杏並木を映すことができなかつた。

研究の成果として、坂道を作品中に出した例としてシーン13の淡路坂がある。

主人公の千坂が東京へ上京し、大学の授業課題を初々しい感情で挑戦する姿を坂道とともに描写し、新しい世界への期待感をのぼり坂で表現をした。



シーン18では、同級生のライバルとの口喧嘩のあと、苛立ちを表現するため、錦華坂のジグザグとした場面を歩かせることによって、思い通りにいかない主人公の感情を表現した。



シーン27では、主人公が自分の甘さに気づき、落ち込んでいく心情を貝坂によって表現した。なだらかに下っていく坂道を見下ろすように撮影することによって、主人公の落ち込んでいく姿を視覚的に表した。



3.4 仕上げ作業と上映

撮影後、編集作業をおこなった。当初30分ほどの完成尺を目指していたが、最終的な編集バージョンは39分であった。これは、映像をじっくりと見せる、という編集方針を採用

したためで、坂道の景観が美しく、または演出意図のとおりに撮影できたためであり、1カットの映像をじっくりと観客に見てもらいたいためである。通常の映画では、短くしていた編集箇所も、この映画では、意図的に長くしている部分があった。こうした編集作業によって、より演出意図が伝わりやすくなっただろうと考える。1、2月は、音声を中心とした仕上げ作業が行われた。

3月2日に「ちよだコミュニティ ラボライブ！」で、研究発表だけでなく、上映していただけのことになったため、2月末での完成を目指して作業をし、上映前までに作品は完成了。「ちよだコミュニティ ラボライブ！」では、研究発表と共に、ブースでの作品上映をさせていただき、本編が初公開となった。

さらに3月9日には、城西国際大学紀尾井町キャンパスにて、学内スタッフ、関係者にむけての完成試写会を行った。今回の研究に参加したゼミ学生、また出演者やスタッフにむけて、映画を上映した。その後、さまざまな感想がよせられ、今回の研究においての考察が進んだ。

4. 考察

4.1 研究と制作によって得られたこと

今回、坂道というモチーフを意図的に物語に組み込み、また演出として坂道を場面設定に活かすという手法は、自分自身、これまでの映像制作では、あまりしなかったものである。ストーリーをいかに語るべきか、というのは映画ドラマにとって非常に大きな主題であるが、坂道という切り口でストーリーを語るというのは珍しい手法であると思う。

今回そうした手法をとることで気づいたのは、坂道というモチーフは、非常にシンボリックであると同時に、場面設定としてもとても効果的なものである、ということである。これまでの先達の作家の方々が、坂道を使用してきたことも、こうした坂道の機能の豊富さ故であるというのが改めて実感できた。坂というものをひとつとっても、そこに葛藤や希望、また落胆などという感情を表現できるのだ。こうした技法を身につけることによって、より豊で奥深い映像のストーリテリングができるようになるはずである。

4.2 撮影における困難 坂道の大変さ

しかし、映像撮影にとって坂道という場所は良いことだけではないと気づいた。実際の撮影における坂道は、とても撮影が難しい場所であった。先述したが、実際の坂道の撮影は、通行人が多く通る場所であり、また、坂道の性質上、まっすぐと先のほうまで見えている坂道が多い。その場合、通行人を映さないためには、まっすぐな道から通行人がぞいでいただけるまで待たないといけない時間ができるのである。そうした時間は撮影にとっては、なにもできない時間であるため、こうした問題をいかにクリアできるか、が課題であると思う。

さらに、実際の坂道は変更できない。もっと急であったら、もっとなだらかであったら、と思いながら撮影していたことも事実である。本当に、もっと自分の演出意図に近づける坂道を撮りたいのであれば、黒澤明監督のように実際のオープンセットなどで坂を作って撮影をするか、新海誠監督のように、アニメで表現する、というふうにするのが良いのである。

5. 結論とまとめ

今回、坂道をテーマにした短編映像作品を制作するという研究を通して、映像演出とはなにか、という問題を深められた。同じシーンを撮影するにしても、そこが普通の道か、坂道なのかで、できたシーンの効果というのが変わってくる。ストーリーとしては、同じ内容かもしれないが、そこにある登場人物の感情や、見ている観客に無意識に与える効果という意味では、坂道という機能はとても効果的なものだとわかった。

また、映像のなかにある景観として、坂道はとても魅力的なものであった。画面の手前と奥との差が大きいので、映像に奥行きがでやすい効果があった。

私が普段から仕事をする街として、千代田区の景観を撮影したのだが、これまで見ていた風景と、撮影が終わったいまでは、明らかに変わっているのが実感できる。坂道ごとにある名前と由来の書かれたポールを見つけると、何気なく立ちどまって見てしまう。由来も含めて、この坂にあった歴史にまで思いを寄せたりもする。同じ風景であっても、以前と違って見えるようになったのだ。多くの人に、この作品を見てもらったあと、千代田区を歩いてもらいたいと願っている。そして坂の多い風景を楽しんでもらいたい。

6：千坂物語 脚本

タイトル「千坂物語」

脚本：佐藤克則

登場人物

塙本千坂（つかもと ちさか・女・18歳）：大学生

塙本清（つかもと きよし・男・50歳）：千坂の父

中坂 幹人（なかざか みきと・男・18歳）：千坂の同級生

教員A

教員B

S 1 田んぼ (昼)

田んぼが広がる田舎道。
塚本千坂 (つかもと ちさか・女・18歳) が
ぽんやりと風景をながめながら歩いている。

千坂の声 「私は坂のない街で育ちました」

田んぼの平坦な道をゆったりと進んでいく千坂。

千坂の声 「でも、私の名前は、千の坂と書いて、ちさか、といいます」

S 2 千坂の実家・リビング (夜)

千坂が、大学の入学願書の書類に「千坂」と名前を書いている。
父の塚本清 (つかもと きよし・男・50歳) がリビングにいて、
清は映画を見ている。

千坂 「お父さん」
清 「ん」
千坂 「なんで、あたしの名前は千坂なの？」
清 「……うん」

清、映画を見ながら生返事。

千坂 「ねえ」
清 「……お母さんがつけたんだよ」
千坂 「それは知ってる。意味とかあるんでしょ？」
清 「……まあ……うん」
千坂 「で、意味？」
清 「……人生には、千の坂がある」
千坂 「うん……それで？」
清 「ん……だから、そういうことだよ」
千坂 「どういうこと？ ぜんぜんわかんない」
清 「……いつかわかるよ」

清、微笑み、静かに映画を見入る。

千坂の声 「あまり喋らない寡黙な父は、私を一人で育ててくれました。
いつも家にいると、黙って映画ばかり見ている父が、
どうやって母と結婚できたのか、いまでもわかりません」

S 3 : 実家の庭

千坂の声 「そんな父のもうひとつの趣味は、写真です。
何を撮っているのか、いまいち、わからないときもありますが、
いつも熱心にカメラを覗いています」

S 4 リビング (昼)

千坂の声 「家には父の写真がたくさんあります
ただ不思議なのは、母の写真をほとんど見たことがないのです。

壁に風景写真がいくつも額にいれてかざってある。

千坂 「お母さんの写真は撮らなかったの？」
清 「……うん」
千坂 「なんで？」

清、また違う映画を見ている。

清 「その頃、カメラを持ってなかったんだ」
千坂 「……」
清 「カメラを買った時には、もう会えなくなっちゃったから……」
千坂 「……」
清 「だからいま……たくさん撮ってるんだよ」

たくさんの風景写真のなかに、一枚、千坂の写真がある。

千坂の声 「私が小さいころに母は亡くなりました。

だから、母のことは、ほとんど覚えていません」

高校入学の日の写真で、千坂は高校の制服を着ていて、少し不機嫌そう。

母も、急に写真を撮られるのが好きじゃなかったのかもしれません

千坂は、自分の写真を見つめる。

千坂の声「そんな父と一緒にいたからなのか……私も映画や写真に興味を持ちました」

S 5 : リビング (夜)

清が料理をしている。

千坂が清と話す。

千坂「大学なんだけど……メディア関係の勉強をしたくて」

清「メディア？」

千坂「映画とか、撮影とか、色々そういう系の分野がある学部」

清「……」

千坂「映画とか写真とか好きだし、まだ、将来なにするかはっきりわからないけど、

大学で勉強しながら、決めていこうかなって」

清「……」

テーブルの上には、城西国際大学のパンフレットが置いてある。

千坂「これ、東京の大学なんだけど……」

清「……」

千坂「大丈夫？」

清「……大丈夫って？」

千坂「……東京ってことは、一人暮らしになるし……お父さん、平気なのかなって」

清「……」

千坂「……どう？」

清「…千坂が決めたら……応援するよ」

千坂「……寂しくならない？」

清「もちろん」

千坂「……もちろんって、どっち？」

清、微笑んで答えず、料理のほうに顔をむける。

S 6: 実家: 玄関 もしくは駅前?

スーツケースを持っている千坂。

千坂「じゃあ、行ってくるねー」

清、玄関のほうにくる。

千坂「いってきます」

清「……うん」

千坂、清から言葉が出るのを少し待つが、なにもないのでドアから出ようとする。

清「千坂」

千坂「ん?」

清、リビングにもどって、カメラを手に持ってもどってくる。

千坂「写真、撮らなくていいよ」

清「……違うよ」

清、カメラを千坂に渡す。

千坂「私がお父さんの写真撮るの?」

清「……違う、あげる」

千坂「え? だって、これ、お父さんの」

清「いいから」

千坂、手にもったカメラを見つめる。

千坂「……いいの?」

清「それで、自分の坂をみつけて」

千坂「自分の？」

清「これから千坂は、千の坂と出会うから」

千坂「……わかった……ありがと」

千坂、カメラを構えて、清にレンズを向ける。

しかし、撮らない。

千坂「これ、どうやって使うの？はは」

S 7:メインタイトル「千坂物語」

S 8:千代田区：街並みと坂・九段坂

都会の喧騒のなか、街を歩いていく千坂。

スーツケースを持っている。

千坂の声「東京の千代田区に私が通う学校はあります」

*

*

*

S 9:JIU 大学外観

大学の外観

千坂の声「これが私の通う大学です」

S 10：大学の教室（昼）

千坂の他、10数名ほど学生がいて、緊張した顔つきでいる。

教員Aが教卓に立っている。

学生は1人ずつ、自己紹介をしている。

学生A「趣味は、キャンプなんで、みなさん、一緒に焚き火しましょう」

学生たちが拍手する。

教員A 「(名簿を見ながら) じゃあ、次は……塚本」

千坂が、立ち上がる。

千坂 「あ、はい。あの、えっと、塚本千坂といいます。

志望は、映像分野で、カメラをやりたいです。よろしくお願いします」

みんな拍手する。

教員A 「はい、じゃあ、次は……中坂か」

中坂 幹人 (なかざか みきと・男・18歳) が立ち上がる。

教員A 「坂繋がりだな。千坂と中坂」

千坂、中坂幹人を見つめる。

教員A 「ちなみに、このキャンパスの目の前に中坂って坂があるんだよ。

千代田区は坂が多い街だから、今度見てみるといいよ」

幹人、千坂をちらっとみる。

千坂、幹人にかるく会釈するような態度。

しかし、幹人はピイッと無視した感じで視線をずらす。

中坂 「もう話していいですか?…」

教員A 「え、ああ、どうぞ」

中坂 「中坂幹人です…映画やりたいっす」

幹人、それだけ言うと、ちょっと乱暴に席に座る。

しんと静まる教室。

幹人の反応に困った周りの学生たちはパラパラとした拍手をする。

千坂、ちょっと驚いた表情で幹人を見つめる。

千坂の声 「…東京は坂も多いし……いろんな人もいるみたいですね……」

S 1 1 : 大学前 : 中坂

道の傍に中坂の紹介をしている柱がある。

そこには、中坂の由来も書かれている。

千坂の声 「坂の名前にも、それぞれ由来があるようです」

すると、そこに幹人が通りかかる。

千坂、それに気づいて、すこし焦る。

会うと気まずいので、慌てて逃げる。

S 1 2 : 大学 : 教室

授業をしている教室。

教員 B。

教員 B 「はい、じゃあ、さっそく課題をみなさんにやってもらいます」

千坂も授業を受けている。

教員 B 「みなさんには一枚の写真を撮ってもらいます。

テーマはひとつ、この 1 週間で出会った、一番、素敵な風景を撮る、です」

千坂の声 「授業が始まりました。高校とは違って、いろんな授業があります」

教員 B 「みなさんにはこれから、表現者になってもらいます。

表現者として、この 1 週間に出会った素敵な風景を見つけることで、
今まで見ていた世界とは違う世界を感じてほしいんです」

S 1 3 : 新坂(淡路町)

父からもらったカメラで写真を撮る千坂。

千坂の前には、坂道がある。

写真を撮る千坂。

千坂の声「わたしは坂のある風景を撮ることに決めました」

坂道を歩いていく千坂

(今までの世界から違う世界へ行く、橋渡し：希望のメタファー)

S 1 4 : 幽霊坂 (淡路町)

幽霊坂の由来を見つめる千坂。

千坂の声「由来が面白い坂もあったりで……幽霊が出る坂とか」

* * *

帯坂

帯坂の番長皿屋敷の由来を写真に撮る千坂。

千坂の声「怪談、番長皿屋敷の舞台になった坂もあったり」

S 1 5 三べ坂

三べ坂を撮っていく千坂。

千坂「岡部さん、安部さん、渡辺さんの3人が住んでいたから
三べ坂なんてのもあったりします」

S 1 6 山王坂

山王坂から、国会議事堂を撮る千坂

(許可申請の関係から、未撮影)

S 1 7 印象的な坂

坂を撮っていると、ふと気がつくと、近くに幹人がいる。

驚く千坂。

幹人もカメラを持っていて、写真を撮っている。

幹人「……」

千坂、気まずくなつて、声をかける。

千坂「ども……」

幹人「……」

千坂「あの、おなじアドバイザークラスの」

幹人「知つてゐる」

千坂「あ……、そうですか」

幹人「坂繫がり」

千坂「まあ……はい」

幹人、また無言になつて写真を撮り始める

千坂、きまずい感じ。

千坂「あの、やっぱり、坂をテーマにするんですか？」

幹人「……」

千坂、さらにきまずい感じ。

千坂「……あの……じゃあ、あたし、帰ろうかな……」

千坂、引き返そうとすると…

幹人「そのカメラ、自分のやつなの？」

千坂「あ。うん。私のなんだけど、お父さんから貰つて」

幹人「……お父さん、写真やつてゐるの？」

千坂「うん」

幹人、千坂に近づき、カメラを見つめる。

幹人の距離の近さに、さらに気まずくなる千坂。

カメラと、千坂を交互に見る幹人。

幹人「…オーバースペックだね」

千坂「……え？」

幹人、すると、その場を去っていく。

千坂「オーバー？」

千坂、スマホを取り出して、調べ出す。

千坂の声「オーバースペックとは……その人の能力よりも過剰に高い性能であること」

千坂「はあ！？」

千坂、顔をあげて幹人を探すがすでに遠くを歩いている。

(2人の上下における関係性を示す坂)

S 1 8:イライラの坂：錦華坂

錦華坂の坂道をくだりながら、イライラしながら歩いている千坂。

千坂「むかつくんですけど！……」

ぶつぶつつぶやきながら歩く千坂。

人にぶつかりそうになりながら、早足で歩いていく。

(場面設定：イライラの急ぐ感じを表す)

S 1 9：千坂の部屋（夜）

イライラしながら電話をする千坂。

千坂「ほほほほ初対面の人に、オーバースペックって言う普通？！」

清の声「…………うーん」

千坂「うーん、じゃないよ、ちょっと慰めてよお父さん！」

清の声「……まあ」

千坂「だって、それはさ、カメラのレベルと私の実力はあってないかもだよ！」

事実だけど、写真も見てないのに、言う！？信じらんないんだけど！」

清の声「……そうだなあ……」

千坂、ため息をつく。

千坂「もう、お父さん……ちょっとは話してよ……」

清の声「いや……安心したよ」

千坂「え、今のはどこが？」

清の声「千坂は、千の坂だって…たくさんある坂の一つを

もう見つけてそうだからさ」

千坂「……そうなのかなあ」

清の声「たいへんな坂ほどいいんだよ。頑張りな」

千坂「……うん」

千坂、少し微笑む。

S 2 0 :諏訪坂 (ゆるやかな坂)

音楽シーン・

千坂、写真を撮っていく。

S 2 1 : 淡路坂 (急な坂)

S 2 2 : 男坂 (階段みたいな坂)

千坂の声「この街には、ほんとにたくさん坂があるんですね」

写真を撮る千坂。

千坂の声「ゆるやかな坂、急な坂、階段みたいな坂」

千坂の声「わたしもいつか、自分の坂を見つけられるといいな、と思います」

S 2 3 :授業

映画用の機材を扱っている授業風景。

千坂もカメラを触っている。

離れたところで、幹人も機材を触っている。

それを見る千坂。

千坂の声「授業もすこし専門的になつたりで、覚えることもたくさん」

S 2 4：三宅坂

笑顔で三宅坂から皇居のお堀の写真を撮る千坂。

千坂の声「そんな感じで頑張っていたんですが…」

S 2 5：教室・授業

20名ほどの教室。

千坂も授業を受けている。

教員A「じゃあ、今日は、それぞれのインタビューを撮りましょう。

チームは私のほうで決めたんで、隣合わせで座ってください」

* * *

千坂と幹人が隣あって座っている。

また千坂は、しんどそうな表情。

幹人は無表情で無言。

教員A「では、インタビューのテーマは「目標」です」

ホワイトボードに「目標」と書かれている。

教員A「どれだけ、このテーマで深掘りできるか頑張ってみてください」

他の学生たちが撮影を始め、ザワザワした教室。

千坂、幹人をちらりと見るが、幹人は全く無反応。
息を整え、意を決する千坂。

千坂「じゃあ、私から撮るから、質問していいかな？」
幹人「…………」
千坂「…………はい、もういい、わかった。あたしから撮るね」

千坂、スマホを撮り出し、幹人に向ける。
ちらりと千坂のスマホを見る幹人。

幹人「あのカメラ、使わないの？」

その言葉にまたカチンとする千坂。
千坂の机の上には、父からもらったカメラが置いてある。

千坂「(小声で) ……オーバースペックだから使わない」
幹人「は？」
千坂「なんでもない！私から質問するから！あなたの目標はなんですか？！」

幹人、無表情のまま、口を閉じている。
だんだんとイライラしてくる千坂。

千坂「……あなたの！……目標は！」
幹人「映画を撮る」
千坂「……はい……そうですか……それは、どんな映画ですか？」
幹人「俺にしか撮れないような映画」
千坂「具体的には」
幹人「まだ実力がないから撮れない……でも努力はしてる」
千坂「どんな努力をしてるんですか？」
幹人「高校 1 年から毎月 1 本、短編を撮ってる、撮った作品は必ずコンテストに出している。脚本も長編を書いてる。海外にも留学したいから英語も勉強してる。夏には、こっちに留学して海外の学生と映画を撮る」

千坂、幹人の言葉に驚くが、なるべくそれを表に出さないようしている。

千坂「……ありがとうございます。質問は以上です」

幹人、自分のカメラを取り出す。
それを千坂に向ける。

幹人「目標はありますか？」
千坂「……」

無表情のままの幹人。千坂に向けられるレンズ。

幹人「目標はありますか？」
千坂「あります！……私は……映画が好きで……写真も……だから撮影とか」
幹人「映画、好きなんですか？」
千坂「好きです……子供の頃から、父とたくさん映画を見てて……」
幹人「見てるだけ？」
千坂「……」
幹人「映画を作ったことは？」
千坂「ない……です」
幹人「……これから撮りたい映画は？」
千坂「……撮りたいのは、これから……考えて……」

幹人、ため息を軽くつく。
録画をやめカメラを下ろす。

幹人「……目標、ほんとにあんの？」

まっすぐな幹人の視線。
千坂、それに耐えられず、咄嗟に椅子から立ち上がる。
ガタンという音。
周囲の学生、すこし驚く。

千坂は、自分のバックをもって、教室から出していく。

机の上には父からもらったカメラが残されている。

S 2 6 : 大学の階段

階段を急いで降りる千坂

S 2 7 : 貝坂

坂を走る千坂。

途中、息が切れて、トボトボと歩きだす。

苦しそうな表情。

(暗い気持ちに落ち込んでいくメタファー)

S 2 8 : 千坂の部屋

ぐったりとした千坂。

ベッドにもたれかかっている。

スマホを取り、電話をしようとするが、やめる。

千坂の声「すっかりぼろぼろになってしまい…父に電話しようかと思いましたが……なぜかこの日はできなく……」

ベッドで横になる千坂。

息が荒くなっている。

千坂の声「……昼の出来事のせいなのか、新しい生活の疲れなのか……

その日の夜、私は熱が出てしまいました」

汗もかく千坂。

千坂の声「……熱が出た夜は、変な夢もみたりするもので」

S 2 9 : 千坂の夢 : 大学

暗い教室。

千坂が一人で座っている。

教卓には、幹人が笑顔で立っている。

幹人「目標なんかなくたっていいんだよ」

千坂「うそつき」

幹人「目標があったって、つらいだけだよ」

スクリーンには、パワポで「目標」という文字が出ている

千坂「黙ってよ」

幹人「目標を叶えられる人なんか、少ないんだから」

千坂「うるさい」

笑う幹人。

幹人「だから言ったろ、君にはこの世界がオーバースペックなんだよ」

千坂がなにか反論しようと口を開くが……

S 3 0 : 千坂の夢 : 実家

千坂「違う！」

場面は一転し、父の清といふ。

千坂「お父さん……？」

清は優しそうな表情を千坂に向ける。

清「……」

千坂「……私の目標ってなんだと思う？」

清「……」

千坂「……そうだよね……自分で見つけるんだよね」

清「……」

千坂「……自分の坂を見つけるって、こういうことなんだよね？」

清「……」

清、写真を一枚、取り出す。
そこには、千坂に似た女性が写っている。

千坂「これ…私？」
清「……若い頃のお母さん」
千坂「え？」

千坂、写真を見つめる。

清「……千坂はお母さんと似てる。彼女もたくさん悩んでた」
千坂「……」
清「そしてね、自分には見つけられなかつた、たくさんのこと。
千坂には見つけてほしいって。だから、千の坂、っていう名前をつけたんだ」

千坂、母の写真を見ながら、微笑む。

S 3 1 : 千坂の部屋 (朝)

ふと、目が覚める千坂。
部屋は朝の光に包まれている。

千坂の声「気がつくと私は、2日ほど寝ていたようでした。
おかげで熱はさがり、すっかり元気になっていました」

S 3 2 : 印象的な坂

坂を進んでいく千坂。
晴れ晴れとした顔で歩いている。すると、歩く先に、幹人がいる。驚く千坂。

千坂の声「まだ私は寝ぼけていて、夢の続きを見てるんでしょうか？」

千坂に気づく幹人は、立ち上がり、無表情のまま近づく。

千坂「……」
幹人「……これ」

幹人、手に持っていた千坂のカメラを差し出す。

千坂「あたしの？」

幹人「教室に忘れてたから」

千坂「……」

カメラを受け取る千坂。

幹人は千坂を見ている。

千坂「……なに？」

幹人「熱出したって聞いて、なんか……俺のせいかなって」

千坂「……」

幹人、謝ろうとしているのか、言葉を選んで考える。

千坂「ちょっと待って」

幹人「え？」

千坂「いま謝ろうとしてる？」

幹人「……ああ、まあ」

千坂「やだ、謝ってほしくない、だって、この前の言われたことは本当だし」

幹人「……」

千坂「私はまだ目標がない、なんにもしてない、努力も、才能だってないかも。

でも、頑張るから、負けないから、

自分が進んでくのをきちんとこれから見つける」

千坂、言葉を言い切り、微笑みを幹人に見せる。

千坂「だから謝らなくていい」

幹人「……そつか……」

幹人、うなずいて、少しだけ笑う。

それを見る千坂。

幹人は坂をあがっていく。その後ろ姿を見つめる千坂。

ふと手にもっていたカメラで、坂をのぼる幹人の後ろ姿を撮る。

カシャ、というシャッター音。幹人、それに気づいて振り返る。

幹人 「いま、俺のこと撮った？」

千坂、笑う。

千坂 「違うって……坂を撮っただけ」

坂道をあがる千坂。

千坂の声 「このとき……私のひとつめの坂が見つかりました」

-----了

2025 年 3 月 31 日
城西国際大学メディア学部メディア情報学科
佐藤克則 准教授

